

「八重山語小浜方言の三型のアクセント体系について」<sup>1</sup>

セリック・ケナン（国立国語研究所）

麻生玲子（名桜大学）

## 1. はじめに

### ● 背景：

- 八重山語諸方言の韻律体系に関する記述はまだ少ない。
  - ◇ アクセントの基本的な対立数さえ正確に捉えられていない方言が残っている可能性が高い。
  - ◇ 当然ながら、アクセントの基本的な対立数を正確に把握していない状態では韻律的構造を明らかにすることはできず、八重山諸方言の韻律的な構造の解明は課題として残されている。

### ● 先行研究

- その中で、複合語の音調に基づいた調査結果では、松森（2015）で小浜方言・古見方言、荻野（2022）で宮良方言が琉球祖語の三型アクセント体系を保持している可能性が示された。
- さらに、松森（2015）の研究では、宮古語と同様に八重山諸方言においても「韻律語」（五十嵐 2015、2016）と呼ばれる（音節と文節の間に位置する）韻律単位を想定する必要があるという仮説が提示された。

### ● 先行研究の問題点

- 松森（2015）は中心となる内容は別にあっただうえで、小浜方言および古見方言の韻律体系について論じているため、そもそも個別方言の記述に割かれている紙幅は少ない。それゆえ、提案されている韻律語を導入した三型の韻律体系は仮説の段階であり、その妥当性を検証する必要があるだろう。以下に問題点と検証方法を2点指摘する。
  - ◇ 単純名詞単独（あるいは数種類の助詞を付加した）だけでは対立の観察が難しいということが背景に考えられるが、研究対象が複合名詞に限られている。単純名詞の基本的な対立数についてまず考察する必要がある。
  - ◇ 提示されている例が限られているため、名詞と助詞の様々な組み合わせでアクセントの実現を観察する必要がある。

---

<sup>1</sup> 本研究は 22KF0370、21H00353、20H01259、国立国語研究所 共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（代表：山田真寛）および「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（代表：五十嵐陽介）の助成を受けたものです。

● 本研究の目的

- 本研究の主な目的は、八重山語小浜方言の韻律体系について、調査結果から以下の3点を示すことである。
  - ◇ 単純名詞は、3つのアクセント型（a型、b型、c型）が区別されている（4節）。
  - ◇ 名詞と助詞の様々な組み合わせにおけるアクセント調査の結果、松森（2015）が想定している通り、それぞれのアクセント型の音韻的な解釈をするにあたり「韻律語」という単位を導入することが必要である。このことを踏まえ、各アクセント型の音韻的解釈を行う（5節）。
  - ◇ さらに、小浜方言全体のアクセント体系の全体像を明らかにするよう、名詞のみならず動詞のアクセントについても報告する（7節）。
- 最後に八重山語宮良方言も取り上げ、調査結果に基づき、以下の3点を示す（8節）。
  - ◇ 小浜方言と同様に単純名詞は3つのアクセント型が区別されている。
  - ◇ 小浜方言と同様に韻律語という単位を導入する必要があるようである。
  - ◇ 小浜方言と宮良方言はアクセント型の音韻的指定および韻律的構造が対応している。

## 2. 小浜方言と宮良方言

### 2.1 概要

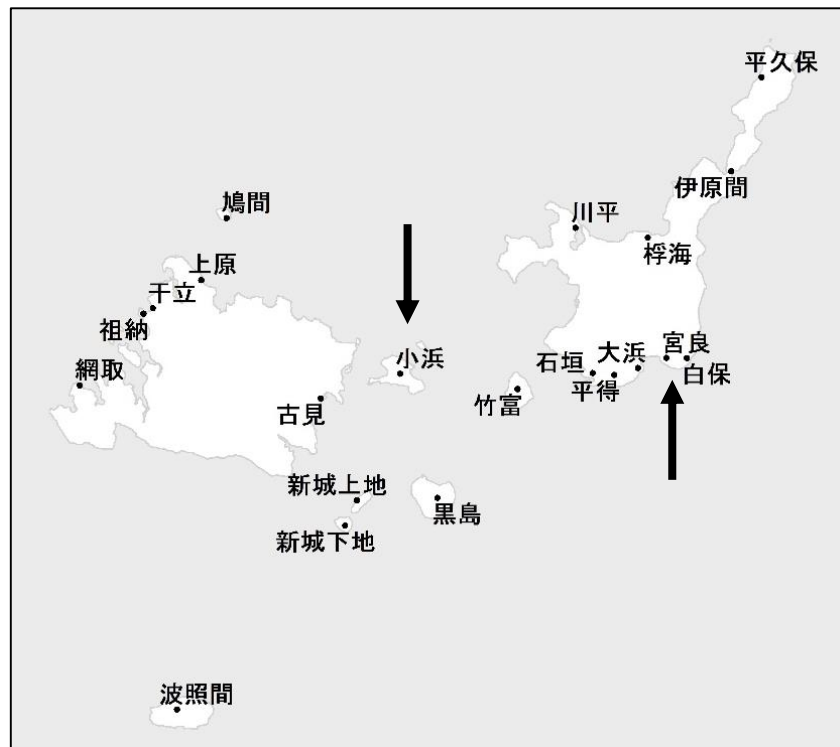


図1 八重山諸島と字の名

小浜方言<sup>2</sup>と宮良方言<sup>3</sup>はそれぞれ沖縄県八重山郡竹富町字小浜と石垣市字宮良で伝統的に話されている言語である。ローレンス（2000）によると、小浜方言は八重山語諸方言の中に西表島古見方言と最も近く、次いで黒島方言や竹富方言、鳩間方言と近いとされる。ただし、この研究は宮良の系統的位置を扱っていない。1771年に起きた明和の津波によって宮良の人口が大幅に減少したことにより、小浜島から宮良村へ320人強制移住があった（石垣2013、武者・永瀬2000）。そのため、小浜方言と宮良方言は系統的に近い可能性がある。しかし、Davis（2016b）が報告しているように、宮良方言の話者の直感によると宮良方言の話者にとって小浜方言よりも宮良付近で話されている石垣市中心部の方言（石垣四箇方言）の方が理解しやすいとのことである（Davis 2016b: 172）。

一方、八重山諸方言内の共有改新を検討してみると、宮良方言と小浜方言の共有改新（「ミミズ」の第2音節における母音の変則的な変化、「棘」におけるnの付加、「しゃっくり」の語形、「す

<sup>2</sup> 仲原（2004）によると、小浜方言の音素体系は子音16個（/p, b, t, d, k, g, s, z, c [ts] ~ [tʃ], m, n, r, w, j, h, ' [ʔ]/）と母音6個（/i, ī, e, a, u, o/）から成る。上記の他に/R, Q, N/の拍音素を認めている。これに対して、Davis（2018）は/ʔ/を子音音素として認めておらず、さらに拍音素は用いていない。本稿では、Davis（2018）の分析に従う。ただし、語形はIPAで提示する。

<sup>3</sup> 仲原（2003）によると、宮良方言の音素体系は子音16個（/p, b, t, d, k, g, s, z, c [ts] ~ [tʃ], m, n, r, w, j, h, ' [ʔ]/）と母音6個（/i, ī, e, a, u, o/）からなる。上記の他に/R, Q, N/の拍音素を認めている。これに対して、Davis（2016b）は/ʔ/を子音音素として認めておらず、/h/とは別に/f[ɸ]/の音素を認めている。なお、同研究によると母音の長短の対立が確認されているのは/a, i, u/の3つである。本研究では、Davis（2016b）の分析に従う。ただし、語形はIPAで提示する。

る」における s>h の音変化)が見つかる。しかし、それと同時に、宮良方言の語彙体系の中に明らかに石垣系のことば(「今」の語形、「ミカン」の a 型化)も見られる<sup>4</sup>。つまり、宮良方言は系統的に小浜方言の系統を引きながら、石垣島の言語の影響を(強く?)受けていると考えられる。

以下では小浜方言に焦点を当て述べる。

## 2.2 先行研究

小浜方言に関する先行研究は概して多くはない。

- 音声・音韻(音素)・文法については、平山・他(1967)、琉球方言研究クラブ(1969)、仲原(2004, 2005)、Davis 2018, 2019)
- アクセントについては、上村(1959)、平山・他(1967)、松森(2015)に含まれる簡略的な記述と名詞の ab/c の所属情報を報告したセリック・他(印刷中)。
- 話者による 3 点の語彙集(高原 1980, 記念誌編集委員会(編) 2010, 宮里 2018)。ただし、いずれもアクセント情報は掲載されていない。

以下、アクセントに関する先行研究について詳しく述べる。

## 2.3 アクセントに関する先行研究

### ● 上村(1959)

小浜方言の 28 語の単独と属格助詞 nu を伴った発話のピッチパターンに基づき、小浜方言における類別語彙における類の統合は 123/45 である(類別語彙 2 音節名詞第 1・2・3 類が第 4・5 類と区別されている)という結論を示した。琉球祖語の系列(松森 2000a, 2000b)で再解釈すると、小浜方言は AB/C の体系を持つ。

### ● 平山・他(1967)

平山・他(1967: 55-57)によると小浜方言の名詞アクセント体系は以下の通りである(1)<sup>5</sup>。

- 2 拍語に 2 つの型(頭高型・尾高型)が区別される。
- 3・4 拍語に 3 つの型(頭高型・中高型・尾高型)が区別される。

#### (1) a. 頭高型

[u]sɯ, [u]sɯnu ...	「牛, 牛が...」
[pə]ŋa, [pə]ŋanu ...	「鼻, 鼻が...」
[ki]:, [ki]:nu...	「毛, 毛が...」
[ka]:ra, [ka]:ranu...	「川, 川が...」

<sup>4</sup> 本発表では共有改新の比較データを省略する。

<sup>5</sup> 例ではピッチのピークが実現する拍を[○](「○」は任意の拍)のようにマークする。なお、本発表では「拍」を「モーラ」の意味として用いる。

b. 中高型 (3 拍語以上)

fɯ[ta]i, fɯ[ta]i,nu... 「額, 額が…」

tsi[ka]ra, tsi[ka]ranu... 「力, 力が…」

c. 尾高型

[usu], usu[nu] ... 「臼, 臼の…」,

pə[na], pəna[nu] ... 「花, 花が…」

[ki:], ki:[nu]... 「木, 木が…」

平山・他 (1967: 56) より抜粋 (表記の一部を改変)

「中高型」についてはそれが「頭高型」の異音である可能性が指摘できる。まず、「頭高」と「中高型」の所属語彙は同じ系列 (A 系列) に対応している。次に、「中高型」の所属語彙 (の殆ど) は無声化した音節から始まるのに対して、頭高型に分類される語にはそのような特徴が見られなく、「頭高型」と「中高型」は第 1 音節の有声性に基づいて相補分布している(2)。したがって、第 1 音節が無声化する場合、ピッチの下降が 2 音拍目に移るというルールを想定すれば、「頭高型」と「中高型」を同じアクセント型の異音として解釈できる。

(2) 「頭高型」と「中高型」の所属語彙 (3 拍)

a) 「頭高型」: akupj 「欠伸」, ka:ra 「川」, aburu 「扇」

b) 「中高型」: haŋatsi 「鼻血」, fɯtai 「額」, tsɯkara 「力」, pətatsi 「二十歳」

「尾高型」については、単独では語末が高ピッチで実現するのに対して、nu 「～の／が」が後続する環境では高ピッチが nu の方に移る(1c)。また、「尾高型」で実現する高ピッチはそれを担う単位が音節であるが伺える (「木」の例)。

● 松森 (2015)

複合名詞のデータ (10 語) をもとに小浜方言は三型のアクセント体系を持つと主張する(3)。

(3) a 型

[gusu] hataki 「唐辛子畑」 [gusu] hataki ngeedu 「唐辛子畑へぞ…」

[bira]n hataki 「にら畑」 [bira]n hataki ngeedu 「にら畑へぞ…」

[ak]kon hataki 「芋畑」 [ak]kon hataki ngeedu 「芋畑へぞ…」

b 型

[mu]i hata[ki] 「麦畑」 [mu]i hata[ki] ngeedu 「麦畑へぞ…」

[ma]mi hata[ki] 「豆畑」 [ma]mi hata[ki] ngeedu 「豆畑へぞ…」

[gu]ma hata[ki] 「胡麻畑」 [gu]ma hata[ki] ngeedu 「胡麻畑へぞ…」

c 型

sjin[zja] hataki 「砂糖黍畑」 sjin[zja] hataki ngeedu 「砂糖黍畑へぞ…」

goo[ja] hataki 「苦瓜畑」 goo[ja] hataki ngeedu 「苦瓜畑へぞ…」

nabee[ra] hataki 「ヘチマ畑」 nabee[ra] hataki ngeedu 「ヘチマ畑へぞ…」

tama[naa] hataki 「キャベツ畑」 tama[naa] hataki ngeedu 「キャベツ畑へぞ…」

松森 2015: 72-73 より抜粋（表記の一部を改変）

上記のパターンを解釈するにあたって、松森（2015）は宮古語と同様に「韻律語」（五十嵐 2015、2016）という韻律的単位を想定している。「韻律語」とは「2 モーラ以上の語根・接語によって形成される」と定義されており、例えば語彙的語根（gusu「唐辛子」、biran「ニラ」、akkon「芋」、hataki「畑」など）と2拍以上の接語（kara「～から」、ngee「～へ」など）が韻律語を形成するというものである。松森（2015）は小浜方言のアクセント体系について次のような解釈を提案した（4）。

#### (4) 小浜のアクセント体系の音韻的解釈（松森 2015:73）

- a 型：1 目目の韻律語の2 拍目の後に下がり目が指定されている
- b 型：2 目目の韻律語の末尾音節が高い
- c 型：1 目目の韻律語の末尾音節が高い

上村（1959）、平山・他（1967）、松森（2015）の先行研究のデータから、少なくとも2つの型が区別されていることは明らかであるが、松森（2015）の主張する3つの型が区別されているかどうかについては、次の点から検証が必要である。

- 報告されているデータは複合語に限られているため、単純名詞も3つの型が区別されているかどうかについて不明のままであり、検証が必要である。
- 「韻律語」を想定するにあたり、五十嵐（2015）などでなされたように、対象語と助詞の様々な組み合わせのアクセントの実現を観察するなど、細かい考察が必要である。

### 3. データ

本発表のデータは2022年4月から2023年5月までの間に行った数回の調査で得られたものである。協力者は小浜出身で現在は石垣市に在住の男性話者2名（話者A：昭和10年生と話者B：昭和13年生）である。本発表では話者Bの資料を報告する。

音声データの収集はMarantz社PMD561（録音機）とSHURE社SM35XLR（マイク）のセット、あるいはZoom社H4n（マイク内蔵録音機）を使用して行った。アクセント資料はセリック・大

浦（2022）のフォーマットに従って整理しており、現時点での名詞に関する資料の詳細は表1の通りである。

表1 発表時点の名詞に関するアクセント資料（話者B、「X」は対象語）

品詞	枠文	資料点数	
名詞	X	「X」	116
	X ...	「X...」	27
	X=nu ...	「Xが/Xの...」	319
	X=ja ...	「Xは...」	60
	X=n ...	「Xも...」	9
	X=kara ...	「Xから...」	364
	X=kara=du ...	「Xからぞ...」	14
	X=magi ...	「Xまで...」	39
	X=nge ...	「Xへ...」	116
	X=nge=n ...	「Xへも...」	8
	X=nge=du ...	「Xへぞ...」	21
	X=nga ...	「Xに...」	2
	X=nga=du ...	「Xにぞ...」	42
	X=ti=tu ...	「Xとぞ...」	61

#### 4. 環境別で見た名詞のアクセントの実現とアクセントの基本対立数

話者B（昭和13年生）のデータに基づき、単純名詞のアクセントの実現を環境別に報告・分析し、その結果に基づき、単純名詞は3つのアクセント型が区別されることを示す。

##### 4.1 環境1：単独発話および 属格・主格助詞 =nu を後続させた枠文

単独発話および 属格助詞 =nu を後続させた環境では、2通りのパターンが観察される。

- 語頭に下降が実現するパターン
- 語末に上昇が実現するパターン

語頭下降のパターン(5)は、次の特徴を持つ。

- 語頭から2拍目にピッチのピークが実現し、その直後にピッチの下降が実現し、=nuも含め、3拍目よりすべての拍が低く発音される。
- ただし、2拍名詞の単独発話の場合は語頭の1拍目に高ピッチのピークが実現し、その直後にピッチの下降の下降が実現する。
- また、1拍目が無声化する場合は2拍目の中に下降が実現することもある。

#### (5) 環境1における語頭下降パターン

対象語	X	X=nu ...
「米」	ma]i	ma[i]=nu ...
「嫁」	ju]mi	ju[mi]=nu ...
「口」	fɯ[tsi]	fɯ[tsi]=nu...
「草」	fa:]	fa[:]=nu ...
「豆」	ma]mi	ma[mi]=nu ...
「種」	tɔ]ni	tɔ[ni]=nu ...
「川」	ka[:]ra	ka[:]ra=nu ...

語末上昇のパターン(6)は、次の特徴を持つ。

- 単独の発話では語末の音節のみが高く実現する。
- 属格助詞=nu が後続すると高音調が助詞の方に移り、語頭から=nu の直前までの拍が低ピッチで実現し、属格助詞=nu のみが高ピッチで実現する。

#### (6) 語末上昇パターン

対象語	X	X=nu ...
「前」	ma[i	mai=[nu ...
「鍋」	na[bi	nabi=[nu ...
「禪」	sɔ[ne:	sɔ[ne:=[nu
「首」	nu[bui	nubui=[nu ...
「瓦」	ka:[ra	ka:ra=[nu ...

ミニマルペアが多数（「米」・「前」, 「川」・「瓦」等々）見つかる。したがって、この環境で観察されるピッチパターンの違いは、語彙的に決まっていると解釈されるべきで、平山・他（1967）などの先行研究の通り、小浜方言の単純名詞は少なくとも2種類のアクセント型を区別していることが確認できる。

### 4.2 環境2：奪格助詞 =kara を後続させた粹文

名詞に奪格助詞 =kara を後続させた粹文では、対象語の長さにより、観察されるパターン数が異なってくる。すなわち、

- 2拍名詞は2通りのパターンが観察される。
- 3拍名詞は3通りのパターンが観察される。



まず、2拍名詞は次の2つのパターンが観察される(7)。

- 語頭に下降が実現するパターン：語頭から2拍目にピッチのピークが実現し、その後ピッチの下降が実現する。
- 文節末に上昇が実現するパターン：文節の末尾音節のみが高く発音される。

(7) 環境2における2拍名詞の実現

対象語	X=kara ...	環境1での実現
「米」	ma[i]=kara ...	
「嫁」	ju[mi]=kara ...	
「口」	fɯ[tsi]=kara ...	
「草」	fa:=ka[ra ...	語頭下降
「豆」	mami=ka[ra ...	
「種」	t̚ani=ka[ra ...	
「前」	ma[i]=kara ... <sup>6</sup>	語末上昇
「鍋」	na[bi]=kara ...	

上記の(7)の実現から次の指摘ができる。

- 環境2で語頭下降が実現する語の一部は、環境1では語末上昇で実現している。これらの語（「前」、「鍋」など）は環境1で、語頭下降で実現する語（「嫁」など）と対立しているため、環境2で同じ音調になっていることは「中和現象」による結果と解釈できる。
- 環境1で語頭下降が実現する語の一部（「草」「豆」「種」）は、環境2で文節末上昇が実現する。そして、ミニマルペアも存在する（「下」対「舌」）ため、文節末上昇のパターンは他のパターンと語彙的に対立するパターンであると解釈できる。
- 逆に言うと、環境2で文節末上昇のパターンで実現する語が、環境1において対立する語の一部（「米」「嫁」など）と同じ音調になっていることは「中和現象」による結果だと解釈できる。

次に、3拍名詞は3通りのパターンが観察される(8)。

- 語頭に下降が実現するパターン：語頭から2拍目にピッチのピークが実現し、その後ピッチの下降が実現する。
- 文節末に上昇が実現するパターン：文節の末尾音節のみが高く発音される。
- 語根末音節の卓立パターン：語根の末尾音節のみが高く発音される。

<sup>6</sup> 環境1で語末上昇が実現する CV<sub>1</sub>V<sub>2</sub>の語は環境2では [CV<sub>1</sub>V<sub>2</sub>]=kara ...で実現することもある。このパターンに所属する CV:の語は基本的にで実現する。

(8) 環境 2 における 3 拍名詞の実現

対象語	X=kara ...	環境 1 の実現
「川」	ka[:]ra=kara ...	語頭下降
「腕」	undi=ka[ra ...	(語頭下降)
「禪」	sə[ne:] =kara ...	
「首」	nu[bui]=kara ...	語末上昇
「瓦」	ka:[ra]=kara ...	

4.3 環境 3 : 方向格助詞 =nge を後続させた粹文

名詞に方向格助詞 =nge を後続させた粹文では、語の長さに関わらず 3 通りのパターンが観察される(9)。

- 語頭に下降が実現するパターン：語頭から 2 拍目にピッチのピークが実現し、その直後にピッチの下降が実現する。
- 文節末に上昇が実現するパターン：文節の末尾音節のみが高く発音される。
- n を取り組んだ語根末音節の卓立パターン：n を取り組んだ語根末の音節のみが高く発音される。

(9) 環境 3 における実現

対象語	X=nge ...	環境 1	環境 2
「米」	ma[i]=nge ...		
「嫁」	ju[mi]=nge ...		語頭下降
「口」	fɔ̄[tsi]=nge ...		
「川」	ka[:]ra=nge ...	語頭下降	
「草」	fa:=n[ge ...		
「豆」	mami=n[ge ...		文節末上昇
「種」	təni=n[ge ...		
「前」	ma[i=n]ge ...		
「鍋」	na[bi=n]ge ...	語末上昇	語頭下降
「首」	nubu[i=n]ge ...		
「瓦」	ka:[ra=n]ge ...		

上記の(9)の実現から次の指摘ができる。

- =nge は一部の語について=kara とは異なるパターンが見られる。すなわち、環境 1 で語末上昇が実現する語は、語根末の音節が助詞の n を取り組んで高く発音される。最も、

sa[ra]=nge...「皿へ...」と pa[ra=n]ge...「柱へ」などの例で確認できるように、「語頭下降」と「語根末音節卓立」のパターンがこの環境でははっきりと対立する。

#### 4.4 他の環境におけるアクセントの実現

- =ja 「～は」は=nu と同じ（環境1）実現になる。
- =magi 「～まで」は=kara と同じ（環境2）実現になる。
- =ti=du 「～とぞ」については、環境2に当たると思われるが、焦点助詞=du が「悪戯」をしている様子で、さらなる考察が必要である。

#### 4.5 小結び：小浜方言の3型アクセント

諸環境で観察されたアクセントの実現を表2にまとめる。

表2 環境別のアクセントの実現（ $\mu$ ：1拍，：音節境界、グレーは中和環境）

拍数	型	拍数	環境1		環境2	環境3
			X	X=nu ... (X=ja ...)	X=kara ... (X=magi ...)	X=nge ...
2	a	2	$\mu$ ] $\mu$	$\mu$ ] $\mu$ =nu	$\mu$ ] $\mu$ =kara	$\mu$ ] $\mu$ =nge
	b	2	$\mu$ ] $\mu$	$\mu$ ] $\mu$ =nu	$\mu\mu$ =ka[ra	$\mu\mu$ =n[ge
	c	2	$\mu$ ] $\mu$	$\mu\mu$ =nu	$\mu$ ] $\mu$ =kara	$\mu$ ] $\mu$ =n[ge
3	a	3	$\mu$ ] $\mu$ ] $\mu$	$\mu$ ] $\mu$ ] $\mu$ =nu	$\mu$ ] $\mu$ ] $\mu$ =kara	$\mu$ ] $\mu$ ] $\mu$ =nge
	b	3	$\mu$ ] $\mu$ ] $\mu$	$\mu$ ] $\mu$ ] $\mu$ =nu	$\mu\mu\mu$ =ka[ra	$\mu\mu\mu$ =n[ge
	c	3	$\mu\mu$ ].[ $\mu$	$\mu\mu\mu$ =nu	$\mu\mu$ ].[ $\mu$ ]=kara	$\mu\mu$ ].[ $\mu$ =n]ge
			$\mu$ ].[ $\mu\mu$		$\mu$ ].[ $\mu\mu$ ]=kara	$\mu$ ].[ $\mu\mu$ =n]ge

- 環境3では3通りのパターンが観察されている。それぞれのパターンの間にはミニマルペアが存在するため、これらの音調の違いは語彙的に決まっていると解釈しなければならない。
- 環境2における3拍名詞も環境3で観察される3通りのパターンに対応するパターンが観察される。
- その他の環境では、基本的に2通りのパターンのみが観察されているが、中和現象が起きていると解釈できる。もっとも、2拍名詞について、2通りのパターンしか観察されない環境1と環境2における実現を見合わせると、3つの異なる語群を想定せざるを得ない。

結論として、小浜方言の単純名詞は3つのアクセント型（a型、b型、c型）が区別される。

## 5. 韻律的構造と各アクセント型の音韻的解釈

表2の実現を見ると、どの環境でも一貫した実現を示すa型を除いて、b型とc型に関する一般化はすぐには分からない。そこで、小浜方言のアクセントの実現を解釈するにあたり「韻律語を想定することが有効である」という仮説（松森2015）について検証する。

「韻律語」は宮古語のアクセントの実現について正しい一般化を導き出すために想定されてきた韻律的単位で、その形成ルールは「2モーラ以上の語根・接語の左端に韻律語境界を挿入せよ」（五十嵐2016:38）のように定義されている。この単位を導入することによって、一見一貫していないパターンについて音韻的な一般化をすることが可能となる。(10)に示す水納島の名詞アクセントの実現で確認できるように、文節が同じ長さでも、名詞に付く助詞や助詞の連続によって異なるパターンが実現している。例えば、c型の語に1拍助詞の連続=nu=du「～がぞ」が付くと、文節の末尾拍の直前に下降が実現しているが、=mai「～も」が付くと、ピッチの下降が文節末から3拍目の直前に実現しており、パターンの説明が一貫しない。

### (10) 環境別で見た水納島方言の名詞アクセントの実現（セリック 2020）

型	語	X=ja ...	X=nu=du ...	X=mai ...	X=nu=gami ...	X=kara=du
a型	「川」	gama=a	gama=nu=du	gama=mai	gama=nu=gami	gama=kara=du
b型	「腕」	jama=a	jama=nu=]du	jama=ma]i	jama=nu=ga]mi	jama=kara=]du
c型	「舟」	fune=]e	funi=nu=]du	fu]ni=mai	funi=]nu=gami	fu]ni=kara=du

しかし、「韻律語」という単位を導入すると、c型が一貫して一番目の韻律語の末尾拍の直前に下降が実現するという一般化が成立する(11)（韻律語の境界を「( )」で示す）。同様に、特殊な実現が観察されるX=nu=duの環境を除き、b型も一貫して2番目の韻律語の末尾拍の直前に下降が実現している。

### (11) 韻律語で見た水納島の各アクセント型の実現

型	語	X=ja ...	X=nu=du ...	X=mai ...	X=nu=gami ...	X=kara=du
a型	「川」	(gama=a)	(gama=nu=du)	(gama)=(mai)	(gama=nu)=(gami)	(gama)=(kara=du)
b型	「腕」	(jama=a)	(jama=nu=]du)	(jama)=(ma]i)	(jama=nu)=(ga]mi)	(jama)=(kara=]du)
c型	「舟」	(fune=]e)	(funi=nu=]du)	(fu]ni)=(mai)	(funi=]nu)=(gami)	(fu]ni)=(kara=du)

宮古語には(12)のような特徴があり、これらは韻律語を導入することでうまく説明できる。

### (12) 「韻律語」を持つ体系から予測される特徴

- A. 単独と1拍接語が付いた場合と、2拍接語が付いた場合とでアクセントの実現パターンが異なる。

- B. 単純名詞と2拍以上の接語の組み合わせと、2つの構成要素から成る複合語の単独発話や1拍の接語の付いた発話が同じアクセントパターンで実現する。

小浜方言にも(12)の特徴があることを示せる。

- Aは成り立っていることを既に見てきた(表2)。
- Bも成り立っていることを(13)のデータから確認できる。

(13)

型	X=kara ...		X+Y=nu ...	
a	me[:]ra=kara ...	「川から...」	me[:]ra+muni=nu ...	「宮良方言の...」
b	aba=ka[ra ...	「油から...」	jamatu+muni=[nu ...	「大和方言の...」
c	tara[ma]=kara ...	「多良間から」	tara[ma]+muni=nu ...	「多良間方言の...」

よって松森(2015)で仮定されているように小浜方言でも韻律語が有効に機能する。結論として、上記のデータより小浜方言の韻律体系についても「韻律語」を想定することが妥当である(14)。

(14)

型	環境	実現	
a		(me[:]ra=nu)...	「宮良の...」
b	(X=nu)...	(a[ba]=nu)...	「油の...」
c		(tarama=[nu)...	「多良間の」
a		(me[:]ra)=(kara)...	「川から...」
b	(X)=(kara)...	(aba)=(ka[ra)...	「油から...」
c		(tara[ma])=(kara)...	「多良間から」
a		(me[:]ra)+(muni=nu)...	「宮良方言の...」
b	(X)+(Y=nu)...	(jamatu)+(muni=[nu)...	「日本語の...」
c		(tara[ma])+(muni=nu)...	「多良間方言の...」

一方、残る問題点として、=kara と =nge が同じく2拍以上の接語なのに、それぞれの助詞が付いたときのアクセントのパターンが異なることが挙げられる。しかし、=nge については、それと同源の宮古語の =nkai, =nke: は特殊な韻律的構造を持つことがよく知られている(松森 2014、五十嵐 2015:11-12、セリック 2020:174、セリック 2021)。すなわち、宮古語における =nkai, =nke: は1拍助詞と2拍助詞と同じ振る舞いを示しており、その韻律的構造は =n(kai, =n(ke: である(15)。小浜方言における =nge についても同様の構造を想定すれば、2つの韻律語が形成されるときのパターンが実現していることが確認できる(16)。

(15) 水納島

a 型 : (gama=n)(ke:)... 「洞窟へ...」

b 型 : (jama=n)(ke:)... 「林へ...」

c 型 : (funi=]n)(ke:)... 「船へ...」

(16) 小浜方言における=nge の韻律的構造

対象語	(X=n)(ge)...
「米」	(ma[i]=n)(ge)...
「嫁」	(ju[mi]=n)(ge)...
「草」	(fa:=n)([ge)...
「豆」	(mami=n)([ge)...
「前」	(ma[i=n])(ge)...
「鍋」	(na[bi=n])(ge)...

次に、韻律語を想定した小浜方言のアクセント型に関する松森（2015）の音韻的解釈の妥当性を確認する必要がある。本稿の(4)で示したものを(17)として再掲する。

(17) 小浜のアクセント体系の音韻的解釈（松森 2015:73）

a 型 : 1 つ目の韻律語の 2 拍目の後に下がり目が指定されている

b 型 : 2 つ目の韻律語の末尾音節が高い

c 型 : 1 つ目の韻律語の末尾音節が高い

まず、表 2 で確認できるように、(17)の通り、a 型が環境に関わらず一貫して第二拍にピッチのピークが実現し、その直後に下降が実現している。

次に、c 型も(17)の通り、環境に関わらず、一貫して一番目の韻律語の末尾音節のみが高く実現している。

最後に b 型についてであるが、2 つの韻律語が形成された環境において(17)の通り、2 番目の韻律語の末尾音節が高く実現している。もっとも、b 型の複合語に =kara を付けると、後部要素末尾音節の卓立パターンで実現することが確認できる(18)。つまり、その環境においても(17)の解釈が予測している通りのパターンが観察される。

(18)

型 (X)+(Y)=(kara) ...

a (me:]ra)+(muni)=(kara) ... 「宮良方言の...」

b (jamatu)+(mu[ni])=(kara) ... 「大和方言の...」

c (tara[ma])+(muni)=(kara) ... 「多良間方言の...」

ここでは1つだけの韻律語が形成されている環境でb型がa型のパターンで実現することを説明する必要がある。これに関しては、小浜のa型とb型の中和現象の有り様は多良間方言と酷似していることを指摘する。つまり、多良間・水納島方言と小浜のb型は同じく「2番目の韻律語」という指定を持つため、1つの韻律語しか形成されていない環境では、b型がどのような実現になるかが問題となる。そこで、2つの可能性がある。

- b型のアクセント型を実現させる、すなわちc型と中和する。
- b型のアクセント型を実現させない、すなわちa型と中和する。

多良間・水納島方言には両方の中和が観察されており、b型がどの中和のパターンで実現するかは1拍助詞の種類(a型と中和:=a「主題」、=nu「主格・属格」、c型と中和:=u「対格」、=n「斜格」)や1拍助詞の連続の有無によって決まる。筆者らの調査環境では、小浜方言ではa型との中和が起きており、多良間・水納島方言におけるa型との中和環境とも一致する(=nu「主格・属格」、=ja「主題」)。ただし、多良間水納島方言と違って、同環境でもb型の語がまれにc型として実現することもある。

結論として、次の3点を主張する。

- 小浜方言の単純名詞は3つのアクセント型が区別される。
- 小浜方言におけるアクセント型を解釈するにあたり、宮古語と同様に「韻律語」という韻律的単位を想定する必要がある。
- 小浜方言の各アクセント型の音韻的解釈は松森(2015)の主張通りである。

ただし、a型の音韻的解釈については議論の余地が残されていると指摘できる。つまり、無指定の型として分析が成立している可能性がある。その理由は以下の通りである。

- 卓立の性質の違い

b型とc型によって指定されている卓立は音節を対象としており、その実現位置において韻律語(2番目か1番目)の右端を参照している。これらの型に現れる卓立は位置で対立している同一のものであると考えられる。これに対して、a型で実現している卓立はモーラを対象としており、その実現位置において語頭(「語頭より第2拍」)を参照している。そのため、b型・c型で指定されている卓立とa型で実現している卓立は性質の全く異なるものであることが明らかである。

- b型の中和環境における実現

1つだけの韻律語が形成されている文節においては「2番目の韻律語」という指定を持つb型は指定されている卓立が実現せず、a型と同じパターンになる。それをどう解釈

するかが問題であるが、動機の乏しい有指定のアクセント型の交替と考えるよりは、アクセント型によって指定されている卓立が実現しない場合はデフォルトの音調が実現すると考えた方が自然である。

以上に従って、小浜方言のアクセント型の解釈を(18)のように訂正する。

(18) 小浜のアクセント体系の音韻的解釈 (本発表)

a 型：無指定

b 型：2 目目の韻律語の末尾音節が高い

c 型：1 目目の韻律語の末尾音節が高い

デフォルトルール：アクセントによる卓立が実現しない文節は語頭下降で実現する。

ちなみに、宮古語与那覇方言について小浜方言のデフォルトルールと酷似するルールが報告されている。この方言では「無核韻律語の言い切りでは、韻律語末尾に向かって緩く上昇していく」(新田 2023:61)。これによってアクセント核が実現しない 2 拍名詞の言い切り形は全て「○[○]」のパターンで実現している(19)。また、奄美語湾方言のアクセント体系に関する上野 (2012) の解釈も参照されたい。

(19) 与那覇方言に見られる音調の中和 (新田 (2023:60) より、表記一部改変)

型	語	X	X=nu=du ...
a	「胡麻」	(gu[ma])	(guma=nu=[du]) ...
b	「麦」	(mu[g])	(mug]=nu=[du])...
c	「豚」	(wa[:])	(wa[:]=nu=du)...

6. 小浜方言の名詞のアクセント所属と琉球祖語で再建されている系列の対応について

小浜方言は、セリック・他 (印刷中) で指摘されているように、琉球祖語で再建されるアクセントの系列と環境 1 におけるアクセント型の実現とで、規則的な対応関係が認められる。すなわち、環境 1 で a 型のパターンで実現する語、すなわち a 型と b 型に所属する語は琉球祖語の AB 系列に対応し、c 型のパターンで実現する語、すなわち c 型に所属する語は C 系列に対応する (ただし、この論文のデータは話者 A の資料に基づく)。

今回のデータ (話者 B) についても規則的な対応関係が認められる。つまり、a 型に分類される語は A 系列に、b 型に分類される語は B 系列に、c 型に分類される語は C 系列に対応する(19)。

(19) 小浜方言におけるアクセント型の所属と琉球祖語の系列との対応関係

- A 系列・a 型：mai 「米」、jumi 「嫁」、turu 「鳥」、ka: 「井戸」、tunaru 「隣」、sita 「下」、kandza 「匂い」、musi 「虫」、ussi 「牛」 ...



- B 系列・b 型 : jama 「山」、bata 「お腹」、a: 「粟」、aba 「油」、sɨma 「島」、ana 「穴」、sɨta 「舌」、fa: 「草」、mami 「豆」、mita 「土」、ami 「雨」、ti: 「手」、tɨni 「種」、duru 「泥」、ki: 「木」、mma 「馬」 ...
- C 系列・c 型 : mai 「前」、nabi 「鍋」、kui 「声」、pɨra 「柱」、ka:ra 「瓦」、in 「海」、tinda 「太陽」 ...

以上の対応関係より、小浜方言における a・b・c のアクセント型の対立は琉球祖語における対立の保持であると言える。一方、単純名詞において B 系列の c 型化（「浜」、「鏡」、「花」...）や b 型～c 型の揺れ（「麦」「着物」「家」...）が見られていることもあり、小浜方言において b 型が c 型へ合流し始めていることが推測される。

## 7. 小浜方言の動詞のアクセント

南琉球の動詞の諸活用形のアクセントは複雑である（与那国方言：上野 2011b、中澤 2023、多良間方言：セリック 2020）。さらに、韻律語を持つ方言は、動詞の活用形によってアクセント型や韻律的構造が異なるという報告がある（セリック 2020）。したがって、南琉球のアクセント体系の仕組みを分析するにあたって、動詞の韻律体系を明らかにしておくことは重要である。本節では、小浜方言の動詞のアクセントに関する調査結果を報告する。

調査内容は次の通りである(20)(21)。

### (20) 対象語

- A 系列 : ho:n 「する」、tɨpun 「飛ぶ」、nakun 「泣く」、bundurun 「踊る」、tɨmirun 「止める」、ma:fun 「回す」、きし 「着る」、kɨrun 「刈る」、ke:fun 「消す」、sɨkafun 「聞かせる」、angaran 「上がる」
- 非 A 系列 : arakun 「歩く」、kun 「来る」、no:fun 「直す」、jumun 「読む」、ukirun 「起きる」、kɨsun 「切る」、umo:n 「思う」、naraun 「習う」、pingirun 「逃げる」、ndirun 「出る」、ungamun 「拌む」、nukofun 「残す」、utirun 「落ちる」、sanganun 「下がる」

### (21) 対象活用形

- 「現在形 2」「過去形 2」「否定形」「過去否定形」「接続形」「連体形」「譲歩形」「否定譲歩形」「否定条件形」（別の動詞リストで「複合語語幹」も調べてある）

調査結果の一部を表 3 に示す。結果として次のことが分かった。

- 動詞は 2 つのアクセントクラスに区別される。
  - a 型動詞は、一貫して活用形・複合語語幹も a 型
  - c 型動詞は、活用形は c 型に分類されるが、複合語語幹は b 型に分類される動詞もある。

- c 型動詞の活用形の実現から、活用形によって韻律的構造が異なることが分かる。つまり、多良間方言と同じく、韻律語を形成する接辞と形成しない接辞を想定する必要がある。
- 多良間方言と同源の活用形がある場合は、アクセント型や韻律的構造が多良間方言と対応する。

表3 小浜方言の動詞アクセント（グレーは中和環境、「-」は対応形無し）

動詞形	nak- <sup>a</sup> 「泣く」	jum- <sup>c</sup> 「読む」	多良間 jum- <sup>bc</sup> 「読む」
現在形 2	(na[ku]n) <sup>a</sup>	(ju[mun]) <sup>c</sup>	(jumɿ)m) <sup>c</sup>
否定形	(na[ka]nu) <sup>a</sup>	(juman[u]) <sup>c</sup>	(juma)n) <sup>c</sup>
過去 2	(na[ki])(j <sub>i</sub> ta) <sup>a</sup>	(ju[mi])(j <sub>i</sub> ta) <sup>c</sup>	音調未詳
過去否定形	(na[ka]na:)(ta) <sup>a</sup>	(juma[na:])(ta) <sup>c</sup>	-
接続形	(na[ki])(j <sub>i</sub> ti) <sup>a</sup>	(ju[mi])(j <sub>i</sub> ti) <sup>c</sup>	(jumi)t)(ti): <sup>c</sup>
譲歩形	(na[ki]wan) <sup>a</sup>	(jumi[wan]) <sup>c</sup>	(jumba)m) <sup>c</sup>
否定譲歩形	(na[ka]na:)(tin) <sup>a</sup>	(juma[na:])(tin) <sup>c</sup>	-
否定条件形	(na[ka]na:)(tara) <sup>a</sup>	(juma[na:])(tara) <sup>c</sup>	-
連体形	(na[ku]) <sup>a</sup>	(ju[mu]) <sup>c</sup>	(jum)] <sup>b</sup>

## 8. 宮良方言のアクセント体系との比較

宮良方言の単純名詞のアクセントを扱った先行研究によると、単純名詞は少なくとも2つのアクセント型が区別されている（平山・他 1967、セリック・他 2022）。すなわち、単独発話や属格助詞 =nu が付いた発話では第2拍の直後に大幅な、急なピッチの下降が実現する「下降型」と、著しいピッチの変動がない「平板型」が区別される(22)(23)。

### (22) 宮良方言の下降型の実現（セリック・他 2022:162）

- mai]=nu ... 「米の...」
- idzu]=nu ... 「魚の...」
- pitu]=nu ... 「人の...」
- matsi]ri]=nu ... 「祭りの...」

### (23) 宮良方言の平板型の実現（セリック・他 2022:162）

- ki:=nu ... 「木の...」
- jadu=nu ... 「戸の...」
- kaṭa=nu ... 「肩の...」
- nasabi=nu ... 「茄子の...」

しかし、これらの研究は名詞と助詞の様々な組み合わせに観察される音調を報告していない。そのため、2つのアクセント型が区別されるという結果が最終的に妥当かどうか分からない。また、本発表で小浜方言について見てきたように、韻律語という単位を想定する必要があるかどうかについても検討が必要である。

そこで、荻野(2022)は地名名詞(「宮古」「西表」「大和」等)を前部要素とする複合語の音調を報告し、この環境では3通りの音調が区別されていることを発見・報告している(24)。a型は先行研究の「下降型」に対応しており、第二2拍(あるいは第3拍)の直後に大幅な、急な下降が実現している。それに対して、c型は「二つ目の韻律句全体で緩やかに下降をしており」、「例えば、二つ目の韻律句が *muni* (言葉) の場合、聞き方によっては */mu.ni/* の */mu/* から下降が始まっているように聞こえ」という(荻野 2022:481)。なお、下降型で実現する下降の性質の違い(「急」対「緩やか」)を表すために、「↓」という記号を使っている。b型は「低平型」、すなわち語全体が低く平たく発音されるという。

(24) 地名名詞を前部要素とする複合語における3通りの音調(荻野 2022:481)

- a型 : *me.e].gu mu.ni* 「宮古言葉」
- a型 : *i.ri].mu. ti mu.ni ~ i.ri.mu]. timu.ni* 「西表言葉」
- a型 : *ku.mo].o.ma mu.ni ~ ku.mo.o].mamu.ni* 「小浜言葉」
- b型 : *ja.ma.du mu.ni* 「大和言葉」
- b型 : *u.kI.na.a mu.ni* 「沖縄言葉」
- c型 : *ha.tu.ma mu↓.ni* 「鳩間言葉」
- c型 : *ta.ra.ma mu↓.ni* 「多良間言葉」

これらの複合語の音調に基づき、荻野(2022)は宮良方言の体系において3つのアクセント型が区別されていると主張し、各アクセント型の特徴について(25)のように一般化している。

(25) 宮良方言の3型の記述(荻野 2022:482)

- A型 : 一つ目の韻律句に下降が見られる(急激な下降)。
- B型 : 下降がない。
- C型 : 二つ目の韻律句に下降が見られる(緩やかな下降)。

宮良方言については小浜ほど詳細な調査を実施していないが、1人のインフォーマント(男性、1946年生)の調査結果では、複合語だけではなく、単純名詞も3つのアクセント型が区別されていることが確認できた(26)。つまり、単純名詞に *=gara*「~から」や *=ge:*「~へ」を付けると、上の(25)で記述されているように3つ音調が区別される。すなわち、a型とc型はそれぞれ第2拍と語末の直後に下降が実現するのに対して、b型は文節全体が平板に発音される。

(26)

型 語	X	X=nu ...	X=gara ...	X=ge: ...
a 「宮良」	me:]ra	me:]ra=nu ...	me:]ra=gara ..	me:]ra=ge: ...
b 「沖繩」	ukina:	ukina:=nu ...	ukina:=gara ...	ukina:=ge: ...
c 「多良間」	tarama	tarama=nu ...	tarama]=gara ...	tarama]=ge: ...

以上のパターンから、以下の点が指摘できる。

- 単独発話や =nu が付いた環境では、b型とc型が中和している。
- 2つの要素から成る複合語の単独発話および =nu が付いた発話と、単純名詞に =gara や =ge: が付いた発話は韻律的に対応している。

これは(12)に提示した、韻律語を想定した場合の予測の A.と B.が真であるということである<sup>7</sup>。つまり、宮良方言についても「韻律語」という単位を想定しなければならないことを意味する。

さらに、b型は「平板」ではないことが(27)から確認できる。

(25) b型の複合語の実現

型 語	X=nu ...	X=gara ...
b 「油鍋」	aba+nabi=nu ...	aba+nabi]=gara ...

システマティックなデータがまだないが、以上のデータからすると、宮良方言のアクセント体系について次の2点が主張できる。

- (単純名詞も含め) 3つのアクセント型が区別されている
- 各アクセント型の実現を解釈するにあたって韻律語という単位が必要である。

そして、宮良方言のそれぞれのアクセント型について仮の音韻的解釈を(26)に提示する。

(26) 宮良方言の3型の音韻的解釈 (本発表)

- a型：第2拍の直後に下降が指定されている
- b型：2番目の韻律語の末尾拍の直後に下降が指定されている
- c型：1番目の韻律語の末尾拍の直後に下降が指定されている

以上、小浜方言と宮良方言を比較していると、次のようになる。

- 韻律的構造が一致している(韻律語を有し、同源語の形態素は同じ韻律的振る舞いをする)。
- a型は語頭下降で実現している。

<sup>7</sup> 荻野 (2022:491-492) が指摘しているように、=ge: の母音が短く発音されることもあるが、長母音で発音されることが多いため、音韻的解釈として長母音であるとされている。

- b型・c型がそれぞれ「2番目」「1番目」の韻律語に指定がある。
- b型・c型で指定されているピッチ変動の locus が「韻律語の末尾拍」で一致している。

一方、次のような違いも見られる。

- 1つだけの韻律語が形成される環境では、小浜方言ではa型とb型が中和するのに対して、宮良方言ではb型とc型が中和する。
- b型・c型の卓立が実現する環境では、小浜方言では語頭から卓立が実現するところまで低いに対して、宮良方言では語頭から高い。

祖語より継承された3型のアクセント体系を持つ水納島方言、小浜方言、宮良方言の比較を表4にまとめる。

表4：南琉球3型アクセント方言の比較

(1:「Xの」、2:「Xから」、3:「Xへ」、4:「X+Yから」)

型	環境	水納	小浜	宮良
a	1	(○○○=nu)	(○○]○=nu)	(○○]○=nu)
	2	(○○○)=(kara)	(○○]○)=(kara)	(○○]○)=(gara)
	3	(○○○=n)(ke:)	(○○]○=n)(ge)	(○○]○)=(ge:)
	4	(○○○)+(○○)=(kara)	(○○]○)+(○○)=(kara)	(○○]○)+(○○)=(kara)
b	1	(○○○=nu)	(○○]○=nu)	([○○○=nu)
	2	(○○○)=(ka]ra)	(○○○)=(ka]ra)	([○○○)=(gara]
	3	(○○○=n)(ke:]	(○○○=n)([ge]	([○○○)=(ge:]
	4	(○○○)+(○]○)=(kara)	(○○○)+(○[○])=(kara)	([○○○)+(○○])=(kara)
c	1	(○○○=]nu)	(○○○]=[nu]	([○○○=]nu)
	2	(○○]○)=(kara)	(○○[○])=(kara)	([○○○])=(gara)
	3	(○○○=]n)(ke:)	(○○[○=n])(ge)	([○○○])=(ge:)
	4	(○○]○)+(○○)=(kara)	(○○[○])+(○○)=(kara)	([○○○])+(○○)=(kara)

## 9. 展望

松森（2015）は「韻律語」という単位が既に南琉球祖語にあったという仮説を提示している。黒島方言のアクセントを分析するにあたって韻律語が必要であることが松森（2016）で詳細に示されたが、本発表では小浜方言と宮良方言についても同様に韻律語が必要であることを示した。この結果は松森（2015）で提示された仮説を指示すると言える。もっとも、動詞の活用形まで含め、南琉球に分布する同源語の語形が同じ韻律的構造を持つということは偶然による結果である

とは考えにくく、これら同源の語形は祖語から同じ韻律的特徴を継承していると考えた方が経済的な説明となる。

以上に従って、分析にあたって韻律語が想定されてこなかった八重山語の他の方言（与那国、波照間、鳩間、竹富、石垣等）のアクセント体系についても韻律語を想定する必要があるかどうか、あるいは、韻律語を持った体系から変化した体系であるかどうかについて検討する必要がある。それを今後の課題としたい。

## 参考文献

- セリック, ケナン (2020) 「南琉球宮古語史」未刊行博士論文. 京都大学.
- セリック, ケナン・麻生玲子・中澤光平 (2022) 「南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント資料」『国立国語研究所論集』22: 157-176.
- セリック, ケナン・麻生玲子・中澤光平 (印刷中) 「八重山祖語の系列再建に向けた小浜方言の AB/C の所属資料」『アジア・アフリカ言語文化研究』106: ページ未詳.
- セリック, ケナン・大浦辰夫 (2022) 『みんなふつ語彙集』東京: 国立国語研究所.
- Davis, Christopher (2016b) 「八重山語宮良方言の音素目録と定動詞屈折形態論」狩俣繁久 (編) 『琉球諸語 記述文法 II』172-190.
- Davis, Christopher (2018) 「沖縄県竹富町小浜島・八重山語小浜言葉」琉球大学国際沖縄研究所 (編) 『シマジマのしまくとうば: 平成 29 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究: 文化庁委託事業報告書』181-199. 沖縄: 琉球大学国際沖縄研究所.
- Davis, Christopher (2019) 「沖縄県竹富町小浜島・八重山語小浜方言の動詞活用について」琉球大学国際沖縄研究所 (編) 『シマジマのしまくとうば: 平成 30 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究: 文化庁委託事業報告書』192-209. 沖縄: 琉球大学国際沖縄研究所.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8: 1-42.
- 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33-57.
- 五十嵐陽介 (2019) 「日琉語類別語彙 (2019 年 5 月 17 日版)」電子データ (アクセス 2021 年 6 月 1 日).
- 石垣實佳 (2013) 『メーラムニ用語便覧』石垣市: 南山舎.
- 記念誌編集委員会 (編) (2010) 『小浜中学校創立六十周年記念誌・ふるさとの味・しまくとうば』, 小浜中学校創立六十周年事業期成会.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究—原理と方法』東京: 塙書房.
- ローレンス, ウェイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁 (編) 『宮良當壮記念論集』547-559. 沖縄: 宮良當壮生誕百年記念事業期成会.
- ローレンス, ウェイン (2006) 「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』40: 101-118.

- ローレンス, ウェイン (2008) 「与那国方言の系統的位罫」『琉球の方言』 32: 59-67.
- ローレンス, ウェイン (2020) 「アクセント変化から見た琉球方言の系統樹と日本祖語音調から見た琉球祖語音調」シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」発表資料.
- 松森晶子 (2000a) 「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方—」『国語学』 51(1): 93-108.
- 松森晶子 (2000b) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』 4(1): 61-71.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における 3 型アクセント体系の発見: 与那覇方言の場合」『国立国語研究所論集』 6: 67-92.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要文学部』 63 :13-36.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系: その韻律単位に関する考察」『日本女子大学 紀要 文学部』 64: 55-92.
- 松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み: その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』 150: 59-85.
- 宮里儉治 (2018) 『クモーマ スマヌ, クトゥバ』私家版. 八島印刷.
- 武者英二、永瀬克己 (2000) 「八重山地方の建築的遺構と民家・集落」法政大学沖縄文化研究所・沖縄八重山調査委員会『沖縄八重山の研究』相模書房.
- 仲原穰 (2004) 「八重山小浜方言の音韻」『沖縄芸術の科学: 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』 16: 259-287.
- 仲原穰 (2005) 「小浜方言と宮良方言の音韻の比較研究」『琉球の方言』 29: 107-120.
- 中澤光 (2023) 「南琉球与那国方言における動詞のアクセント交替の通時的考察」『国立国語研究所論集』 24: 169-194.
- 新田哲夫 (2023) 「南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴」『日本方言研究会第 116 回研究発表会発表原稿集』 57-64.
- 荻野千砂子 (2022) 「沖縄県石垣市宮良」セリック・ケナン、木部伸子、五十嵐陽介、青井隼人、大島 一 (編)『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』 473 - 536.
- 高原繁 (1980) 『ふるさとの味 小浜語彙』小浜郷友会.
- 竹富町 (2022) 「竹富町地区別人口動態票 (令和 4 年 3 月末)」  
[https://www.town.taketomi.lg.jp/userfiles/files/page/administration/toukei/jinko/dou-tai/jinko\\_list\\_R4\\_3.pdf](https://www.town.taketomi.lg.jp/userfiles/files/page/administration/toukei/jinko/dou-tai/jinko_list_R4_3.pdf) (2022 年 5 月 16 日参照) .
- 上村幸雄 (1959) 「琉球諸方言における「1・2 音節名詞」のアクセントの概観」『ことばの研究』国立国語研究所論集 1: 121-140.
- 上野善道 (2011) 「与那国方言動詞活用形のアクセント資料 (2)」『国立国語研究所論集』 2: 135-164.
- 上野善道 (2021) 「琉球喜界島方言のアクセント—中南部諸方言の名詞—」『言語研究』 142: 45-76.